




|   |         |
|---|---------|
|  Data  | 2024-24 |
| 監督・脚本: リュック・ベッソン  |         |
| 出演: ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ/ジョー・ジョー・T・ギブス/クリストファー・デナム/クレメンス・シック/ジョン・チャールズ・アギューラ/グレース・パルマ/イリス・ブリー/マリサ・ベレンソン/リンカーン・パウエル/アレクサンダー・セッティネリ |         |

## みどころ

『落下の解剖学』(23 年)に続いて、話題のフランス映画を鑑賞。『レオン』から 30 年! リュック・ベッソン監督の問題提起作は必見だ!

女装した主人公の顔は、『ジョーカー』(19 年)の主人公とそっくり? 子供の時から、父親からも世間からも虐げられて育った少年のなれの果てはこんなもの? 一瞬そう思ったが、さにあらず。彼はなぜ“ドッグマン”になったの? それを含めて、彼の半生に注目!

それを引き出すのが女性精神科医だが、本作の“陰の主役”は犬たち。『101 匹わんちゃん大行進』(61 年)では犬の可愛さが目立っていたが、本作では、飼い主に忠実な犬たちの、違法かつ過激な役割に注目!

ちなみに、本作の究極のテーマは「Dog (犬) の世界から God (神) の世界へ」だが、哲学にもキリスト教にも疎い日本人には、そのテーマは難しいから、パンフレットにある風間賢二氏(幻想文学研究家/翻訳家)の REVIEW「God から Dog、そして God へ<行きて帰りし物語>」は必読!

## ■□■『レオン』から 30 年! この監督に注目! ■□■

フランスの巨匠リュック・ベッソン監督は、近時、『TAXi』シリーズ、『トランスポーター』シリーズ、『96 時間』シリーズという、「シリーズもの」のプロデュース作品が目立っている。しかし、同監督の名を世界に知らしめた監督作品は、『グラン・ブルー』(88 年)や『ニキータ』(90 年)であり、私が最も強く印象に残った作品は、若き日の(少女時代の)ナタリー・ポートマンがジャン・レノと共演した『レオン』(94 年)だった。ミラ・ジョヴォヴィッチがブルース・ウィルスと共演した『フィフス・エレメント』(97 年)も強烈だった。また、『ジャンヌ・ダルク』(99 年)もそうだった。

そんなリュック・ベッソン監督が、チラシに『レオン』の衝撃から30年「規格外のダークヒーロー爆誕」と書かれている本作を発表！チラシの表には、タイトルにふさわしく(?)、女装した主人公の顔が愛犬の顔と共に大写しに。そして、裏面には「愛は、獐猛で純粹」「“ドッグマン”とは何者なのか？」の文字が！去る3月7日に観た『落下の解剖学』(23年)は素晴らしいフランス映画だったが、それに続くこのフランス映画も必見！

## ■□■少年時代の主人公に注目！こんな父親が現実に！？■□■

本作の主人公ダグラス(ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ)の父親は、闘犬で生計を立てていたから、彼が少年時代から犬に囲まれて育ったのは当然。しかし、不幸だったのは、父親が犬を愛していなかったことと、意地悪な兄を持っていたことだ。ある日、優しいダグラスが飢えた犬たちに食べ物を与えようとしたところ、それを兄に告げ口され、父親の逆鱗に触れたから、さあ大変。何とダグラスは鍵をかけられた犬小屋の中に放り込まれ、“ドッグマン”としての生活を余儀なくされることに。

唯一、ダグラスに優しくした母親(イリス・ブリー)も、缶詰を少し渡して家を出ていくことになったから、ダグラスはさらに父親から責められ、完全な“ドッグマン”状態に……。イヤな時代になった今日、幼児虐待やいじめのニュースが連日報道されているが、これほどひどいのは珍しい。

本作冒頭の舞台は、ニュージャージー州のニューアーク。警察の検問で、1台のトラックが止められるシーンから始まる。その運転席には、女装した怪しげな男ダグラスが乗っていたが、その荷台にはなんと十数匹の犬が！この男は一体何者？

## ■□■拘置所での面会で語られる、ダグラスの半生は？■□■

ジョディ・フォスターがFBIアカデミーの優秀な訓練生クラリス役に扮した『羊たちの沈黙』(91年)は、檻の中に入れられたハンニバル・レクター(アンソニー・ホプキンス)とクラリスが面会するシーンからストーリーが始まった。本作もそれと同じように、警察に拘置されたダグラスに、精神科医の女性エヴリン・デッカー(ジョージョー・T・ギブズ)が面会するシーンから始まっていく。警察がデッカーを呼んだのは、女装した被疑者を“どちら側”(男か女か)に入れるべきかの判断がつかなかったためだ。

その判断を下すべくデッカーがダグラスに質問をしていくと、ダグラスは、人間よりも犬を愛していると話し、さらに「(犬は)美しいけど虚栄心がなく、強くても勇敢だけど驕らない。人間の美德はすべて持っている。でも1つだけ欠点がある。それは人への忠誠心」と、静かにその半生を語り始めることに……。極めてオーソドックスな構成ながら、あのあどけなかったダグラス少年が、なぜ冒頭に見た怪しげな“女装の男”=DOGMANになっていったのかは、彼の話を聞けば、誰もが納得できるはずだ。

## ■□■Dog(犬)とGod(神)！その紙を裏から読むと？■□■

犬を主人公にした映画は、かつてのディズニーのアニメ映画『101匹わんちゃん大行進』(61年)をはじめとして楽しいものだったが、本作はその正反対だ。意地悪な兄は、ダグ

ラスが入れられた檻の前に、「IN THE NAME OF GOD（神の名において）」という文字を書いた紙を貼り付けたが、これは一体ナニ？これは檻の外から読めば「IN THE NAME OF GOD」だが、檻の内側から見れば、まさに“DOGMAN”に、なるほど、なるほど・・・。

本作のパンフレットには、風間賢二氏（幻想文学研究家／翻訳家）の REVIEW「God から Dog、そして God へ＜行きて帰るし物語＞」が収録されており、そこには「逆転世界の囚われ人」「理想の女性像との一体化」「“ジョーカー”としてのパフォーマンス」「Dog（犬）の世界から God（神）の世界へ」という、4つの小見出しで、まずは「視点をずらして考えることの意味」から詳しく解説されている。

本作を鑑賞した人は、誰もがホアキン・フェニックスが主演した『ジョーカー』（19年）を思い出し、それと対比するはずだが、本作には、この REVIEW に書かれている通りの深い哲学が含まれているので、それをしっかり学びたい。

## ■□ダグラスの恋は実らず、次々と試練が！■□

ダグラスが、自由を手に入れる代わりに車椅子生活を余儀なくされることになったのは、父親が檻の中の息子ダグラスに向けて銃を発射したためだ。もっとも、その銃弾は指に当たっただけだったが、檻の壁で跳ね返った銃弾によって脊髄を傷つけられてしまったため、医師たちは、体内の危険な位置に留まった銃弾の摘出をためらうことに。そのため、立ち上がって歩くと髄液が漏れるかもしれないという爆弾を抱えた身体になってしまったダグラスは、その日から両足に装具を付け車椅子での生活を余儀なくされることに。

そんなダグラス少年が養護施設を転々としたのは仕方ないが、デッカーの聴き取りによると、ダグラスは一度だけサルマ（グレース・パルマ）という年上の女性に恋をしたことがあるらしい。その恋模様の展開は、あなたの目でしっかり楽しんでもらいたいが、それがハッピーエンドにならなかったのは必然だろう。そんな痛手を負いながらも、ダグラスが通信コースで大学に入り、生物学の学位をとり、ドッグシェルターで働いていたのは立派なものだ。ところが、州政府から予算の赤字削減策の一環として、施設への支援を打ち切られ閉鎖することになったから、自分と犬たちが生きていくために、ダグラスはいかなる方策を・・・？なぜ、この男にはこんなに次々と試練が襲ってくるの・・・？

## ■□ダグラスの歌声に思わず、涙、涙！■□

日本の歌謡曲には、私の青春時代の青春歌謡も昭和の懐メロも演歌の名曲の数々も含まれ、バリエーション豊かだが、フランスのシャンソンもそれはきっと同じはず。私にはそれはよくわからないが、キャバレーの求人広告を頼りに、キャバレーの歌手として舞台に立ったダグラスの歌声は、それは見事なものだ。ちなみに、私の中学生時代で大ヒットした井沢八郎の『あゝ上野駅』は今、娘の工藤夕貴が歌ってヒットしているが、TVでその歌声を聞くだけで涙ぐんでいる私だから、本作の大スクリーンでダグラスがエディット・ピアフの曲を熱唱すると、私の目からどっと涙が溢れ出ることに。シャンソンはまさに人生を歌うもの。だからこそ、ダグラスの歌声には説得力があり、大きな観客の感動を呼んだ

のだ。しかし、その幸せな生活はいつまで・・・？

## ■□■もう一人の“陰の主役”は、たくさんの犬たち！■□■

『羊たちの沈黙』で見たハンニバル・レクターと同じように、精神科医のデッカーはダグラスの“引き立て役”としての役割に徹しているから、本作の“陰の主役”はデッカー。しかし、本作のもう一人(?)の“陰の主役”は、ダグラスの身辺に控えている犬たちだ。

私もダグラスと同じように犬の人間に対する忠誠心が大好きだが、犬たちがこれほどダグラスの意思を理解し、ダグラスの指示通りに行動していることにビックリ！これなら、タチの悪いギャングに立ち向かうことだってできるから、大富豪の邸宅から宝石類を盗み出すぐらいことは朝飯前だ。もっとも、被害者が雇った保険会社の調査員アッカーマン(クリストファー・デナム)は、かなりのやり手だったから、彼とダグラスとの対決は・・・？

『101 匹わんちゃん大行進』は楽しいだけの映画だったが、本作では大きな犯罪性を帯びた行動でも、あくまで飼い主のダグラスに忠実に動く、たくさんの犬たちの姿に注目！

## ■□■襲撃団とのマシンガン対決は？ダグラスの大往生は？■□■

本作では、早い段階でタチの悪いギャング団(＝通称・死刑執行人)が“みかじめ料”を徴収するシークエンスの中で、ダグラスがクリーニング屋で働く一人の少年との絆を築いていくストーリーが登場する。そこで、ダグラスは彼のために、何ともスカッとする“解決”を果たすのだが、それが死刑執行人から恨まれたのは当然だ。その結果、本作ラストには、ダグラスの拠点を嗅ぎつけた死刑執行人が、多くの部下たちと共にマシンガンを持って襲撃するシークエンスになる。したがって本作では、そこにみるダグラス自身のマシンガンをぶっぱなしながらの奮闘と、ダグラスに忠実な犬たちの逃走力をしっかり楽しみたい。

凶悪なギャング団とこれだけのマシンガン対決を展開すれば、ダグラス自身も傷ついたのは仕方ない。健康な人間は2本の足で立つのが当たり前だと思っているが、“あの時”以来、車椅子生活を余儀なくされたダグラスにとっては、自分の足で立つことはそれ自体が自分が人間であることを確認する大切な行動だった。そのため、キャバレーで歌う時もそれにこだわっていたから、自分の命が尽きようとしている今、ダグラスは自分の最後をどのような姿で迎えるの？

本作ラストは、ダグラスが教会の頂の十字架に向かって、「I'm standing for you！」(あなたのために自分の足で立っている！)と叫んだ直後に倒れ込み、犬たちに囲まれる中で大往生を遂げるシークエンスになる。しかし、日本人には、このシークエンスの意味やセリフの意味が容易に理解できないはずだ。「I'm standing for you！」は、聖書の「ダニエル書」に頻出する言葉で、ドッグマンの祖先である<人狼>ネブカドネザル王の逸話で知られるらしい。そしてその意味は、「私は神を信じます／神に我が身を委ねます」ということらしい。これについては、前述の REVIEW に詳しいので、これは必読！

2024(令和6)年3月14日記